
白詰草への憧憬

紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白詰草への憧憬

【Nコード】

N9462N

【作者名】

紅

【あらすじ】

親友の咲子と同じ高校に入学した美奈。けれど、クラスには二度と会いたくなかった男子がいた。

今日は、高校の入学式。

親友の咲ちゃんと一緒に受験して、二人とも合格したその学校の生徒になれる、晴れやかな日。

晴れやかな日。

の、筈だったのに。

「美奈？　なんか調子悪い？」

咲ちゃんに心配そうな声をかけられて、あたしは慌てて答えた。

「ううん、大丈夫！　全然調子悪くない！」

咲ちゃんは綺麗な顔を曇らせる。

「ならいいけど……。なんか今日、暗くない？朝は元気だったよね」

う。するどい。さすが中学の頃からの親友。咲ちゃんには、ごまかしが効かない気がする。でも、なんだか言いづらくて、

「あー……。つとね……」

あたしは言葉を濁らせる。どう説明しようか考えながら。そんなあたしに、咲ちゃんは優しい声をかけてくれる。

「言いたくないならいいけど、ね。なんかあったらすぐ言ってよ？」

「うん……」

「美奈はすぐ一人で抱え込むでしょ？」

「……ん」

「だから、なんかあったら、困ったらすぐあたしに言って？」

あたしが頷くと、咲ちゃんはにっこりと笑った。あたしもつられて笑顔になる。

ありがと、咲ちゃん。

今は、入学式からの帰り道。あたしと咲ちゃんは徒歩通学で、一緒に帰っている。あたし達の後ろにはあたしと咲ちゃんのお母さんも歩いていて、母親同士の話に花を咲かせている。

今日、もらったプリント。

入学式の後、担任の挨拶のときに配られた、クラス全員の名前が載ったプリント。

それがあたしが暗い理由。そこに、“あいつ”の名前があったから。

もう会うことなんて無いと思ってた。だってあいつは違う高校に行くって聞いたし、しかも同じクラスになるなんて。

姿は見なかった。

あたしは咲ちゃんと一緒でもやっぱり緊張していて、男子はみんな同じように見えたし。プリントをもらった後は、確かめるのも怖くて、なるべくクラスメイトの顔を見ないようにした。あの中に、いたのだろうか。

同姓同名じゃ、……ないよね……。もしそうなら、どれだけいい

か。せつかく咲ちゃんと同じクラスになれたのに。新しい生活が始まると思っていたのに。

あいつがいたら、あたしの高校生活は、どうなるんだろう。

「次、高砂くん、訳して」

呼ばれたのはあたしじゃないのに、その名前を聞いてあたしの体がびくりと跳ねた。

同姓同名じゃ、なかった。あのプリントに書いてあったのは、あたしが会うことを恐れていた、あの“高砂真司”本人だった。

高砂真司は、英語の担当教師に指定された箇所を読み上げ、訳していく。あたしはおそろおそろ彼のほうを盗み見る。まともに彼の姿を見たのは、2年ぶりくらいだろうか。当時よりも大分背が伸びている。

あたしのことを、覚えているだろうか。……覚えていなければいいのに。あたしのことなんて忘れていて、それでクラスメイトとしても何の関わりもなければいいのに。

ノートに答えを書き取るのも忘れて、あたしは溜め息をついた。

「ねえ、美奈はなんか部活入る？」

昼休み、お弁当を食べながら咲ちゃんが聞いてきた。

「んー……。入るとしても文化部かなあ。あたし運動神経悪いし。咲ちゃんはバレー？」

「あたしはね、高校は部活入らないことにしたんだ」

「へっ？そうなの？」

あたしは中学でも帰宅部だったけど、咲ちゃんはバレー部で副キャプテンを務めていた。大会にも出て活躍していたし、バレーは得意の筈だ。だから、高校でもバレー部に入るのかと勝手に思っていた。

「バレーはね、中学のとき完全燃焼したし。高校ではなんか遊びたいていうか……。女子高生らしいことしたいじゃん？彼氏作ったりとかさ」

最後のほうだけ少し声を小さくして言う咲ちゃんが、可愛らしい。

「咲ちゃんならすぐできるよ」

本当に、そう思う。咲ちゃんは美人だしほっそりしてスタイルもいいし。だけど気取ったところがなくて、面倒見もいいし。

咲ちゃんとあたしのお弁当箱を見ながら思う。……。同じくらいの量なのに、どうしてこんなに体型が違うのかな。

あたしはいわゆる、ぼっちゃり。

ダイエットも何度か試してみたけど、やるとストレスが溜まって逆効果だった。どうやらあたしの身体はストレスが溜まると糖分を欲するようで、実を言つと受験勉強のせいで、またちよつと太ってしまった。

……こんなだから、あいつにも……。

「何言つてんの、美奈こそすぐできるよ。あたしが男だったら、絶対美奈に惚れてるもん」

咲ちゃんは嬉しいことを言ってくれるけど。

あたしはなんだか気恥ずかしいのと、困惑とで曖昧な笑顔をつくった。

女子はたまにあたしのことを「かわいい」って言ってくれる子もいるけど、それはたぶんマスコットか何かに対する「かわいい」みたいな感じで。あたしがまるまるっとしてるから。赤ちゃんを見てかわいいって言うのと同じだよ。赤ちゃんが細かったらあんまりかわいくないもんね、たぶん。

……男の子はやっぱり、細い子のほうが好きだよ。例えば咲ちゃんみたいなの。

咲ちゃんは、バレー一筋だったから断ってたけど、中学のときに何回か告白されてた。あたしはちよつと、羨ましかった。

「あ、そういえば高砂くんってさ」

「へえっ!？」

突然咲ちゃんが発したあいつの名前に、びっくりしすぎてものす

ごく変な声が出た。恥ずかしい。他の子達もちらちらとあたしの方
を見ている。……穴があつたら入りたい。

「美奈？どうかしたの……？」

咲ちゃんも不思議そうにしている。あたしは慌てて弁解する。な
んか最近、こんなのはっかだ。

「な、何でもないよ。それより何の話？」「……や、うちのクラス
の高砂くんてさ、あたし達と同じ中学じゃないかと思って。あたし
は同じクラスになったことないけど」

「あ、うん、あたしは2年のとき一緒だったけど」

「やっぱり？なんか見たことあると思った。いい人？」

「え、」

思わず言葉に詰まった。

いい人かどうかなんて、そんなの。

でも、どうだろう、あれはあたしだからであって、咲ちゃんには、
ていうか他の子には。

あれはあたしが、あたしがこんな

「美奈？」

「あ」

いけない。また、思考の波に溺れていた。どうもあの時期を思い

出すと、胸も頭もずきずきする。

「ねえ、どしたの？なんか変だよ。やっぱりなんかあったの……？」

心配してる。咲ちゃん、ごめん。

でも言えない。咲ちゃんにはあんなこと、言えない。
だから。

「あたし、高砂くんのごときはよく分かんない！あんまり、喋ったことないから」

矢継ぎ早に言い切った。咲ちゃんは不思議そうな顔をしていたけど、

「そっか」

と言ってくれた。

高校生になって、1週間が経った。

あたしは毎日びくびくしていたけど、それは杞憂に終わった。高砂真司とは、何もなかった。本当にあたしのことなんか忘れてしまったんじゃないかってくらい。あたし達は会話もしなかったし、目も合わなかった。

結局あたしと咲ちゃんは部活には入らなかった。バレエはほんといいのかなって思ったりもしたけど、部活がなければ咲ちゃんと登下校できるから嬉しかった。

その日は、咲ちゃんは委員会があるというので、あたしは一人で帰ることになった。家が近くて徒歩なのはいいけど、一人で帰るとなると少し寂しい。……なんて思うあたしは、本当に甘ったれた。

咲ちゃんがいなくなったらあたし、このクラスでやっていけたかな。

「い」

親離れならぬ、友達離れをしなくちゃならない。

「おい！」

大きな声で叫ばれて、あたしは硬直した。え、あたし？あたしかな？違うよね、他の人？

「横山」

……あたしだ。

おそろおそろ振り返ると、そこには。

あたしの天敵、高砂真司が立っていた。

なんで。

最初に思ったのは、「なんで」。

予想外の出来事に、あたしの頭は真っ白になる。この1週間、何もなかったのに。なんで今頃、あたしにちょっかいかけてくるの。

パニックに陥りかけているあたしをよそに、高砂真司は自転車を押しながらどんどん近づいてくる。

な、なんで近づいてくるの……!?

「おい」

中学の頃よりも低くなった声に、あたしはますます萎縮する。

「シカトすんじゃないよ」

「え……」

そう言って彼は、あたしの前に何かを差し出してきた。

「……………」

彼の手の中に入ったのは、あたしの生徒手帳だった。

「あ、え、え!?!」

あたし、落としたの!?!?ていうか、拾ったの!?!?

「貰った日に落としてんじゃねえよ」

“ノロマ”

そう言ってあたしに生徒手帳を渡すと 正確には地面に落ちたけど 高砂真司は捨てゼリフを残して去っていった。

残されたあたしは、呆然と立ち尽くしていた。少し砂をかぶった生徒手帳を足元に落としたまま。だんだんと湧き上がってきたのは、恥ずかしさと怒り。

……ノロマって……！

そりゃあたしはどうせトロいけど！拾ってくれたんなら渡してくればいいのに！何も地面に落とすことないじゃん！！

やっぱりあいつは高砂真司だ。中学のときのあいつのままだ。むかつく。嫌いだ。

高砂真司なんか嫌いだ！

怒りに任せて生徒手帳を拾い上げてから、ふと思い当たった。

違う。嫌われてるのはあたしのほうなんだ。

何故か、あたしがあいつを嫌う前から。あいつはあたしのことを嫌っていて、酷いことばかり言われてきた。原因は、分からないけど。

……あからさまに人に嫌われてるっていうのは、やっぱり気分のいいものでは、無い。

生徒手帳についた土を払って、スカートのポケットに押し込んでから、あたしは一人の帰り道を歩き出した。

あいつ　高砂真司とは、小学校と中学校が同じだった。

でも同じクラスになったのは小学5・6年生のときと、中学2年生のときだけ。小学校の頃は本当にただの同級生で、ほとんど話したことはなかった。中学2年でまた同じクラスになってからだ。

あいつがあたしをからかうようになったのは。

まず、目が合ったらジロリと睨まれるようになった。それから、必要があつて会話をするときは嫌味を言われるようになった。仲のいい男子達と、あたしのことを何か噂してるみたいだった。

気分が、悪かった。

イジメとまではいかないけど、意地悪よりは酷かったと、思う。

あたしには、そんなに嫌われる覚えが無かった。

何か気に障るようなことを言っただろうかと考えても、そもそもあちらがからかってくるようになるまで、まともに話したことも無かったし。ただ単に、あたしのことが気に入らないということなのだろう。

ふと、だったらどうして生徒手帳を拾ってくれたのだろう、という考えが浮かんだけれど、その問題はすぐに解決した。親切心なんかじゃない、あたしに嫌味を言うために、あいつは話しかけてたんだ。

子供じみてる。

……世の中には、どうしても合わない人間だって、いる。

みんながみんな仲良くやっていけるなら、戦争も犯罪も起こりはない。高砂真司にとって、あたしは合わない側の人間なのだろう。ただだからって、理由もなくあんな酷いことを言われる筋合いなんて、ない。

記憶が蘇る。

あたしの心に簡単に傷をつけた、あの言葉。

“デブ”

あいつは、そう言った。

あれは中学2年生の冬だった。

放課後委員会の仕事を終えて教室に戻ろうとすると、高砂真司とその取り巻きの男子達の話す声が聞こえてきた。

なんて間が悪いんだろう。荷物を取りに教室に入りたんだけど、入ったらまたあいつらに何か言われるかもしれないし、言われなくて

もあたしの方を見てニヤニヤ笑いながらひそひそ話をするかもしれない。

しょうがない。寒いし早く帰りたけれど、あいつらと顔を合わせるなんて嫌だ。あたしは教室のドアを離れて、廊下の隅であいつらが帰るのを待つことにした。もちろん、あいつらが出てきたらどこかに隠れてやり過ごすつもりだった。

「……横山……」

突然出てきた自分の名前に、心臓が飛び跳ねた。

名前だけは聞こえたけれど、何を話してるかまでは聞こえてこない。どうせいい話でないことだけは確かだけれど。男子達はボソボソと何かを話している。

あたしは迷った。もう少し教室側に行ったら、何の話か分かるかもしれない。でも、悪口だったら、聞かないほうがいいかもしれない。

でも、自分の名前を出されたら……、気になってしょうがない。

だけどそんなあたしの葛藤は無意味だった。
なぜなら。

「ふざけんよ、横山なんかただのデブだろうが」

そう言ったあいつの　高砂真司の　声は、廊下にまで響き渡ったから。その後聞こえてきたのは、男子達の下品な笑い声。

デブ。

あたしは確かに、痩せてるほうじゃない。あいつらがあたしのこ

とを良く思っていないのも知ってる。

だけどそれは。

あたしが一番気にしてることなのに。

あたしは音を立てないように注意して、そこから走り去った。

悔しい。

恥ずかしい。

頭にくる。

あいつらは、ああやっていつもあたしのことを好き放題言ってるのか。あたしが何をしたっていうの。人気のない校舎裏で、あたしは一人で泣いた。

そのことがあってから。

あたしは前以上にあいつを避けるようになった。幸い中学3年生ではクラスが離れたから、顔を合わせることも無かった。そのうち噂であいつはどこか別の高校を受けるって聞いた。今となっては誰が言っていたことなのか、どこの高校だったかも忘れたけど、とにかく今あたし達に通ってる高校じゃなかった。

だから高校が離れればもう、高砂真司と関わることはないと思っただ。その希望はもう潰えたわけだけれど。

でも、高校でもあんな思いをするのは嫌だ。

あたしは考えた。去年や一昨年みたいに、あいつに怯えて学校生活を送るなんてゴメンだ。せつかく受験を乗り越えて高校生になっただから。自身をつけるまではいかなくても、あたしだって。

あたしだって変わりたい。

高校入学はいい機会なのかもしれない。あいつを思い出すと条件反射のように体が竦みそうになるけど、あたしにだって高校生活を満喫する権利がある筈だ。

あたしは自分の部屋のベッドの上に寝転んで布団を握りしめながら、密かに決意した。

「あれ？」

咲ちゃんが何かに気づいたように、不思議そうな声を出した。

「なんか今日のお弁当、ちっちゃい？」

咲ちゃんが見ているのは、あたしのお弁当。

「いつもと同じだよ？」

「え……でも、お弁当箱は一緒だけど、中身が少ないような……」

そう？とあたしはとぼけたように答える。でも本当は、咲ちゃんの言うとおりお弁当の中身は少ない。と言っても少しだけ。朝お母さんが作ってくれていた分を、少し朝ご飯のほうに回しただけ。その朝ご飯も、いつもより少なめにしたのだけ。

あたしは今まで一度も成功したことのないダイエットに再挑戦していた。

といつても、我慢しすぎるとストレスがたまって悪循環になるという自分の性格は分かっていたから、できる範囲で。食事はちよつとずつ減らす。おやつもちよつとずつ減らす。気持ち歩くようにする。その程度。

それで変われるのなら。

きっかけが高砂真司と再会したことだというのは、少し癪だけど。その事実あたしのダイエットに必然性を増した。

もし痩せることができたなら。何か変わるんじゃないか。自分に自身がつくんじゃないか。これからの高校生活がもっと明るいものになるんじゃないか。もっと自分のことを好きになれるんじゃないか

そんなふうに期待した。でもやっぱり、そんな簡単なものではなくて、予想通りあたしはストレスを溜めると暴飲暴食に走りそうになった。だけど少して、思い留まることができた。それは新学期という環境のせいもあったし、高砂真司への意地もあった。

そうしてなんとかダイエットを続行し続けて一ヶ月。咲ちゃんは何となく気づいていて、「無理はしちゃダメだよ」とだけ注意してくれた。

お腹がへっこんだ気がする。いや、確実にへこんだ。満腹にしない、というだけでこんなに膨らみ方が違うのか。普段が食べ過ぎていたんだということがよく分かる。体重も少しは減った。

体重が減る、数字が変わる、というのは楽しいもので。

数字を減らすことが、だんだんとやりがいになっていき。ゆるく着やすくなっていく服はあたしのやる気にますます拍車をかけた。

「美奈」

夕食のとき、お父さんがあたしを呼んだ。お父さんはおしゃべりなお母さんとは反対で、物静かな人。滅多なことで子供を叱りつけ

たりしないし、大抵は聞き役に徹している。

「……なに？」

「ご飯、ちゃんと食べてないんだって？」

ああ。

あたしはお母さんのほうをちらりと見た。こっちに注目しているのが分かる。たぶん間違いない。お母さんがお父さんに言ったんだ。あたしのダイエットのこと。

「食べてるよ。カロリーの高いのは減らしてるだけで、栄養もとってるし」

「それならいいんだが……。三食きちんと食べなさい」
「……うん」

お父さんやお母さんの言うことも分かるし、それが正しいと思う。実際、ダイエットの本にだって栄養バランスや運動の大切さが書いてあるし、無茶なことをすれば体を壊すし痩せもしないってことも分かってる。

だけど今までダイエットなんてうまくいったことのないあたしには、2、3キロとはいえ痩せたということとはとても嬉しくて。この波に乗って、多少無理してでももっと痩せたかった。

冷静になって、後から考えてみれば分かる。あたしはきつと、“痩せたい”というよりも“痩せなきゃ”という強迫観念にとらわれていたのだろう。

そもそもの始まりがそんな精神状態からで、それに空腹と栄養不足が加わって。あたしの心は平穏ではいられなかった。

「いい加減にしないで！」

その日、あたしは逃げ出すようにして家を出た。朝からお母さんと喧嘩、その原因はあたしにあった。イライラして、お母さんに当たって。日頃からダイエツトのことを心配していたお母さんの堪忍袋も切れたらしい。

頭では分かっている。悪いのはあたしだ。お母さんもお父さんもほんとは心配してくれてるんだ。だけどじゃあ、どうしたらいいのだろう。素直に言うことが聞けるほどの余裕はないし、自分の考えを説明して貫き通すほどの意地もない。

ああ、馬鹿みたい。小さなこどもじゃないのに。親に怒られて、涙が出そうになってる。

「……どうか、したの？」
「あ、」

無我夢中で通学路を歩いていたらあたしは、いつの間にか咲ちゃんとの待ち合わせ場所まで来ていた。

「咲ちゃ、」

親友の顔を見たら、尚更涙が溢れてきた。咲ちゃんは黙って、あたしの頭を撫でてくれる。細長い指の感覚が心地よかった。

「あの、ね……」

少し落ち着いてから、歩きながら咲ちゃんに事情を話すことにした。まだ涙声だ。

「お母さんと喧嘩して……、あたしがイライラしてたからなんだけど……」

「うん」

「それでお母さんに八つ当たりしたから……。お母さんもほんとは心配してるんだって、分かるんだけど、でもイライラして、なんかむなしくて……」

「うん」

「もう高校生なのに、叱られて泣くなんて情けないな」

「……美奈、やっぱり無理してる？」

「え？」

無理？ 咲ちゃんの前では我慢せず泣いたから、ちょっとすっきりしたんだけど……。どこが無理してるんだろう。

「ダイエット、辛くない？」

「……」

そっちか。

「なんか、美奈疲れてるなって最近思った。お昼も前より残すよ
うになってるし」

「疲れてる……？」

あたし、学校でもそんなふうだったの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9462n/>

白詰草への憧憬

2010年10月13日04時27分発行